
真夜中の狂った天使たち-MiD night Mad Angels-

Row

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夜中の狂った天使たち - M i D n i g h t M a d A n g
e l s -

【Nコード】

N 0 4 8 9 A

【作者名】

R O W

【あらすじ】

深夜のクラブ、そしてドラッグ。闇の世界へ足を踏み入れた高校生ミツルに未来は？ミツル達と同じ10代、そして大人たちへ向けて送る長編小説。起こりえる現実から目を背けるな。
リアル

プロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。クラブの実体は、現実のそれとは異なります。実在する団体、個人とは一切関係ありません。

ブローグ

フロアの壁に持たれかかったミツルは
ここにいる奴らをマシンガンが何かで全員撃ち殺してやりたいと思
った。

奇声を発しながら踊り狂う女。

ナンパをしている男。

抱き合いキスをするカップル。

外国人。

気取った奴ら。

こつちを見てニヤつくジャンキー…………

もし本当にここにいる馬鹿な奴らを全員撃ち殺すんだとしたら
その馬鹿な奴らと何ら変わらず見えるだろう自分も
撃ち殺すことになるんだろう。

…………まったく意味不明でふざけた妄想。

ミツルは気取って笑った。

「ミッル！」

校門前でヒロに呼び止められた。

「おー、おはよ」

「おはよ！あのさー、来週のテストまでミッルんち通ってもいい？」

話しながら校舎へ向かう。

「・・・また？」

「いや昨日さ、一人でちょっと勉強してみたんだけど、まじさっぱりわかんねー。一人じゃ無理ってことに気づいた！」

「お前いつもじゃねーかよ。たまには一人で勉強させろっての。おれだって余裕って訳じゃないんだかな」

「まあいーじゃん。お礼はするって！」

「そのお礼があつた試しがねーんだよな」

服装や髪についての規程が厳しいうちの学校で

ヒロはかなりの存在感をもったやつだった。

もう金に近い髪の毛と、最近ではまだ五月半ばだというのに、急に肌の色が黒くなりだし

周囲から気味悪がられている。

こうして一緒にいる今、おれも感じる程教師や生徒からの視線が痛々しい。

うちの学年で一番目立っているであろう（彼女達もおそらく目立つことを望んでる）

女子グループなんかからは

「もうガン黒の時代はとつくに終わったのにね」

みたいな陰口を叩かれ笑われている。

まああの本人はまったく気にも留めていないみたいだが。

まったくすごい精神力だなと感心させられる。

いや、そもそも気がついていないのかもしれない（そののほろがすごいが）

幼なじみという縁がなかったとして

ヒロとこの高校で初めて出会っていたとしたなら

まず口の一つも聞かなかったであろうことは間違いない。

自分とはまったく関係のない、これから関わることも一切ないだろう「異人種」として存在を捕らえていたに違いない。

まあ、おれとしてはヒロの憎めない性格も

こつちを巻き込んでくるようなペースも嫌いじゃない。

何よりも長い年月を一緒に過ごしてきた分、気を使わなくていいしわかりやすく月並みに言えば「空気みたいな存在」といったところ

だろうか。

空気にしては少しやかましい気もするが。

まとめれば、おそらくおれの中で友達と呼べるに一番ふさわしい存在だろう。

人と話すことがあまり得意じゃないおれにとって

8クラスもある中、ヒロと一緒にのクラスになれたということは正直なかなかの幸運だった。

クラス毎に分けられているロッカータイプの下駄箱の鍵を開け、靴を上履きに履き替える。

「あーじゃあ今日学校帰り直接ミツルんち行くわー」

「はいよ」

下駄箱からすぐの階段を上り三階へ。

一階は職員室や各教科の教室、各部活の部室。

一年は二階、二年は三階、三年は向かいに建つ別校舎というわけだ。

H、Gと通り過ぎ2 - Fの教室に入る。

教壇から見て右斜め奥の席についてほどなくすると

八時半を示すチャイムが鳴った。

担任の、通称「竹さん」

竹村が今日はなんだか趣味の悪そうな黄土色っぽいサバンナみたい

なネクタイを締め
見慣れたグレーのスーツを着て、小走りで教壇側の入り口から入ってきた。

ホームルームが始まる。

竹村がクラスの名簿を見ながら名前を読み上げていく。

「えさかなほ、おぬまだいき、おざわかなこ．．．．こつだひろき」

「はい！！」

ヒロの隣の席である、あの女子グループの一人が迷惑そうな顔をする。

毎日のことだが笑える。

「．．．．．まえはらみつる」

おれは都内私立高校に通う、ごく平凡かつ、ごく一般的な16歳の男子高校生だ。

何か人よりずば抜けた特技があるわけでもなければ
ルックスが特別いいわけでもない。
かといって特別悪いわけでもない。

俗に裏原系と呼ばれるファッション雑誌を月に一回は買っているし
それに伴って洋服を買うのは結構好きだったりもする。

髪型はナチュラルなミディアム。

駅前の美容院でやってもらっている。短くも長くもない。髪は自分で脱色して茶色い。少しだけ。

学校へ来る前は、朝起きて、自宅でシャワーを浴びた後ヘアワックスを使ってセットしている。

初めて彼女ができたのは中学を卒業した時。

相手は中学の同級生で、女子としては割と仲のよかった真理。当時まあまあかわいいとおれは思っていた。

毎日学校で顔を合わせていた分

お互い別々の高校に入ること、離れてしまう寂しさもあったのだろう。

メールのやりとりをされていて、自然な流れで付き合うことになった。

付き合って約一ヶ月後、初体験も済ませた。

それを境に、週に二回は真理が学校帰り家に遊びに来て働きに出ている母親が帰ってくることにビクつきながら、した。

しかし離れてしまう寂しさだけから付き合ったためか

お互い、高校という新しい環境の出会いや付き合いにどうしても興味がいき

気持ちは冷め始め、夏休みを目前にしどちらからともなく関係は終わった。

おれには変な焦燥感が残った。

それから彼女ができたことはない。

もちろん部活動はしていない。

アルバイトは週に二回、近所のコンビニで。

おそらく、日本の男子高校生全員のデータをとったならその平均的位置に属するのがおれみたいなタイプだろう。

よく言えば平均的。悪く言えば中途半端。

まあ普通が一番だろう。

成績もこの高校では中の中。

ここらへんではなかなかのレベルの学校とは言ってもヒ口のような生徒もいるくらいだ。大したことないようにも思える。

「はい」

「……えー、来週から二年になって初めての中間考査だ。まあおまえ達のことだから心配はいらないと思うが、各自最後まで気を抜かないように。以上。あー、あと今日の一時間目は体育だったよな？移動遅れないように。以上。」

最後にヒ口をじろりと睨み、竹村は教室を出て行った。
いつものことだった。

一時間目から体育。
しかもマラソン。気が重かった。

竹村に睨まれたヒ口は、それを気にする様子もなく

各自が立ち上がり、用意を始める中、頬杖をつきケータイをいじり始めていた。

チャイムが鳴った。

気だるい一日の授業がやっと終わった。

風貌の割には、しっかりとした歩きを見せて、現代社会の「おじいちゃん」が教室を後にするのを目で追った。

竹村がやってきた。

今朝ホームルームで話したと同じようなことを喋り、私生活でも浮ついたことのないように、と最後に釘を刺した。

ヒロは現代社会の時のまま、机にうつ伏せになって寝ていた。

授業中に右斜め前方を見れば、大体この姿勢か、ケータイをいじっているか、漫画を読んでいるかしかない。休み時間も、たまに話にくる以外は同じ三択のどれか。

おれは、大した用もないのにトイレにたつ一択。

今日も体育の授業を受けずに、ヒロは保健室へ行った。

保健室の教員からは、ヒロはなぜか気に入られてるようだ。

中学の時もそうだったが、保健室の教員というのはその学校の、いわゆる問題児というようなタイプの生徒と、仲良くなりたい傾向がある気がしてならない。

竹村が教室を出て行った。

すぐに立ち上がり部活動の用意を始める奴、帰ろうとする奴、今日の授業のノートか何かをまとめ直すメガネの女。ご苦労様。

その中を、席と席の間をすり抜けながらヒロが近づいてきた。

メガネの女にスクールバッグが当たった。女はピクリとも動かず作業を続けた。笑えた。

「帰ろーよ」

「ああ」

机の横に掛けてあったスクールバッグに、机の中の教科書をつっ込み席を立った。

「今日もだるかったなー」

廊下は帰る奴と部活に向かう奴とでこった返していた。

「一時間目から3kmも走ったおれのほうがだるいよ」

「たーしかに」ヒロが笑いながら言った。

学校を出て、近くのバス停でバスを待った。

ヒロは相変わらず周囲の生徒の視線を集めた。

バスが来た。

ギリギリで乗れた。

最寄りの駅まで十分と少し、満員の中揺られた。まともに話すこともできなかった。

ヒロはケータイをいじっていた。

定期を見せてバスを降りた。

大体登校、下校の時に関わらず駅前にたむろしている駅近くの高校の、いかにも頭の悪そうな、時代錯誤の「ヤンキー」達が睨みをきかしてくる。睨むことで何を主張したいのかいつも疑問に思う。

彼らの座り込むすぐ目の前を堂々と歩くヒロは、さぞお怒りをおかしていることだろう。

ヒロに追いつく。

階段を上り改札へ向かう。

「ミッスルー、今日定期忘れちゃったからさー、後くつついていかしてー」

悪びれる様子もなくヒロが言った。

「あー？まあいいけどさ、朝はどうしたの？車？」

「うん」

ヒロはよく母親に車で学校まで送ってもらっていた。

改札機に定期を入れる。

ヒロが後にぴつたりとくつつく。
改札を抜けた。

何もなかったように歩いた。
慣れたものだった。

気の弱そうな駅員は気づいているのか、いないのか。

しばらく歩いて振り返ると、イスに座り、ガラス越しの改札機群を
見つめたままだった。

「．．．．．そーいやバスは？」

「そのまま出てきた」

この駅から、池袋方面へ二つ行くとおれとヒロが住む町の駅だ。
特別栄えているわけではないが、何かに困ることもない。

治安もさほど悪くない。
いい町だ。

電車はすぐ来た。

ヒロへの視線は、同じ車両に乗ったうちの生徒からまだ続く。

ケータイを見た。着信もメールもなかった。
時間は四時を過ぎたところだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0489a/>

真夜中の狂った天使たち-MiD night Mad Angels-

2010年10月9日04時30分発行